

不登校の今日的傾向とその課題

大石 英史

A study on the recent tendency of non-attendance at school and its problem

Eiji OHISHI

(Received September 26, 2003)

1. 不登校の現状

平成15年8月に示された学校基本調査速報によれば、2002年度に不登校で年間30日以上学校を休んだ小中学生は、前年度より約7500人、5.4%減って13万1211人で、1991年度に同じ形式で調査を始めて以来初めて減少した。ただし、中学生における不登校の割合は、37人に1人で、ほぼクラスに1人いる状態は変わっていないし、1991年度の2倍の水準は依然として維持されたままである。また、不登校が続いている理由は、さまざまな要因があって特定できない「複合」と、漠然とした不安などの「情緒的混乱」がいずれも4分の1を超えている。それに「無気力」が約2割、「あそび・非行」が約1割と続いている。すなわち、「複合」と「情緒的混乱」を合わせると不登校の過半数を占めていることになり、その背景には学校での居場所のなさ、友人関係を取り結ぶことの難しさ、教師との関係をめぐる問題、学業の不振、親子関係の問題などさまざまな要因が絡み合っていることが推察され、不登校全体の今日的傾向の一端を示しているように思われる。

また、不登校援助の観点から、2001年度の学校基本調査によれば、全不登校児童生徒のうち同年度内に登校できるようになった児童生徒は約25%である。つまり、約75%の児童生徒は年度内には学校に復帰できないでいる。そして、外部の専門機関や適応指導教室等で何らかの援助を受けた不登校児童生徒は複数回答を含めて4万6185人であり、さらに学校内の養護教諭やスクールカウンセラーに援助を受けた者を加えると10万651人になる。しかし、逆に、専門機関、中間施設、学校等におけるどんな援助も受けていない子どもたちの数は、5万6945人のぼり、全体の4割を超える不登校の子どもたちは周囲から学級担任以外の何の援助も受けずに家に居るということになる。

本稿では、これまで増加の一途を辿ってきた不登校の子どもたちの心理的傾向が現代に向けてどう変わってきたのかについて明らかにし、現代型不登校をどう捉えればよいのかについて検討を加えることを目的とする。

2. 対人体験の時代的変遷

不登校は学校に行かないという形で自己の適応感の回復を図ろうとする2次的適応機制である。そして、その適応機制の中核には、学校という場における人間関係からの退避というテーマが存在している。現在若者に関する社会問題のひとつにひきこもりという現象が見られるが、不登校も学校に行かずに生活時間の多くを家という限られた人間関係の中で過ごしていると考えれば、ひきこもりの若年化した形であると捉えることができる。ちなみに、学校基本調

査における不登校児童生徒数は、1974年の9961人（年間50日以上）を最低にその後上昇し続け、1990年には4万8237人（年間50日以上）、1991年からの年間30日以上という新しい基準になっても増え続け、2001年度には13万8696人となっている。特に、1990年を過ぎてからは10年間で2倍以上の増加となっているが、これは若者のひきこもりの増加時期及びその伸び具合とほぼ重なっていることが推察される。

このような状況の中で不登校の在り様はどう変わってきたのだろうか。この変化をとらえることは今の不登校の在り様を明確にするだけではなく、今を生きるすべての子どもたちの特徴や置かれている状況を明らかにすることにもつながる。さらに、今の不登校の特徴を明らかにしていくことで、このような子たちにどうかかわっていけばよいのかについての示唆を得ることができると考えられる。

そこでまず、戦後わが国における対人関係の体験が質的にどう変わってきたのか、その中で特に対人関係からの退避傾向に関する時代的変遷を辿ってみることで、不登校の在り様の変化についての示唆を得てみたい。

牛島（2000）によれば、1960年代までは、人の前に出ると顔が赤くなるので恥ずかしいという対人恐怖がその典型的な型として存在した。この症状の中核にあるのは「恥ずかしい」という体験であり、このような対人恐怖が1960年代まではその中心を占めていた。これが、1970年代からは、赤面恐怖ではなく、今度は人の目が怖いという視線恐怖に変わってきたという。さらに、1980年代になると、この視線恐怖は、単に人の視線が気になるというものから、徐々に自分の存在が人に迷惑をかけているような気がするという体験へと変わってくる。症状としては、視線恐怖というよりも自己臭恐怖あるいは醜形恐怖という形を取るようになる。筆者の臨床経験からすれば、1980年代後半より、女子中学生の中に、お腹にガスがたまりオナラが不随意に漏れてしまうことを気にして教室に入れなくなる自己臭恐怖がかなり目立つようになった。このように、人とかかわるという体験は、戦後当初「恥ずかしい」という感情に強く彩られていたものから、人の目、その視線が「怖い」という体験を経由し、他者の視線が気になって、自分の居場所を確保できない、さらには、自分の存在や風貌が他者に対して不快な何かを放っているという体験へと変容してきたわけである。すなわち、対人恐怖症者における他者存在の体験様式は、元来日本人特有のものであった「恥ずかしい」というものから「自分は変な人」「居てはならない人」という意識へと追い詰められ、その問題は、同じ対人恐怖であっても他人に対する「怯え」の形へと変容してきたことがわかる。1990年代の後半に起こった中学生による一連のナイフ事件の背景には、他者の存在から自分を過剰に守ろうとするあまり、ナイフを持たないと落ち着かない、ナイフを持つことで心の平静を保とうとする心理機制が認められ、この他者に対する「怯え」の感覚を端的に物語っている。

また、1959年に出版された森田療法の文献の中に登場する森田神経質の患者たちの発言を読んでみると、そこには共通して、その個人の中に何とかしたいという気持ちが非常に強く、恥ずかしいけどそれを克服したいという心情がとてよく伝わってくる。症状に対する強い葛藤、あるいは乗り越えようとする克己心がその人の中に強く存在し、森田正馬との対話の中では、父親との葛藤をテーマとした問題が語られ、その父親を乗り越えるという形で立ち直っていく者が多い。おそらくこの傾向は、1960年代までの対人恐怖症者の基本的な心的構えとその克服の方向をよく示しているように思われる。そして、1970年代の対人恐怖には、克服されるべき対象が父親から母親へと転換し、母親から抑えつけられていたことへの反発を通して、その後父親に近づいていくという方向で克服されていったケースがしばしば見られるようにな

る。これらは、フロイトが指摘したエディプス・コンプレックス克服のテーマに近似するものでもある。このように1960～70年代の対人恐怖克服のストーリーは、親をどう乗り越えるかというテーマのもとに展開されていたのである。ところが1970年代を過ぎてくると、徐々に親との葛藤を乗り越えるというテーマは、自分探しのテーマへと変わってくる。このことに関連して、1970年代から80年代にかけて、大学生の間で今度は「スチューデント・アパシー」という現象が出現する。当時、笠原（1978）は、この症状を「退却神経症」と命名し、その特徴を本業から選択的に退却するが、それ以外の生活部分では普通に活動できる新しいタイプの神経症と捉えている。大学生であれば、授業には出ないがアルバイトやサークルにはちゃんと出ていけるという大学生たちのことを指す。このように本来学生として取り組むべきことから撤退し、自分の気が向くものには精を出すという若者たちの背景には、授業の成績や単位取得に伴う競争的関係への抵抗がある。彼らは勝ち負けにとっても敏感であり、そのような状況に身を置くことを避け、それがない副次的な場所なら普通にやっていた。すなわち、勝ち負けに敏感で劣等感を感じやすく、その背後に完全主義や強迫傾向を持っていることが退却神経症の特徴と考えられていた。そこには受験競争を生き抜き大学合格を果たした若者の、いわば競走社会に対する反動としての意味が込められていたように思われる。

現在の不登校の中には、修学旅行や行事のときだけ参加する子が数多く存在するが、これらの子は、本業を行う場所である教室という場に息苦しさを感ずき、そこからは撤退するけれども、それ以外の場所には参加できるという適応形態を持っている。その意味では、以前大学生の間で起こっていた現象が小中学生へと若年化してきたと言えるかもしれない。

3. ひきこもりの今日的傾向

さらに、バブル崩壊以降の1990年代から2000年代にかけて、若者のひきこもり問題が顕在化してくる。このひきこもりという社会不適応は、競走場からの撤退という意味合いよりもむしろ、自分探しやより快適な自分の居場所を志向することからくる本業からの撤退をテーマとするものである。しかも、本業からの部分的な撤退ではなく、すべての他者とのかかわりを断とうとする「全面撤退」がその特徴となってくる。現代若者のひきこもりが社会問題化する理由は、フリーターのように社会とアルバイトという接点を持ちつつも社会から部分的にひきこもるのではなく、そこから完全に身を引いてしまう、つまり「全面撤退」する若者が増加していることにある。

この傾向と連動するかのように、現代の不登校の子どもたちに共通する傾向に関しても、勝ち負けに敏感というよりもむしろ自分の好き嫌いととても敏感であり、迷いながらもより快適な方向に流されていくという印象が強くなっていく。精神分析的に言えば、エスによる快楽追求と超自我による規制との強い葛藤を自我が克服していくというテーマではなく、そこにあるのは、より快適な方向に向かおうとするエスと現実とその実現を図ろうとする自我との共謀というテーマである。事例的に言えば、対人関係における傷つきやすさを背景にもつ不登校や「何となく行きたくない」という漠然とした理由で学校に行かなくなる葛藤の見えにくい不登校の出現が、このことを裏づけている。また、このような子どもたちの背後には共通して、母親との関係が近過ぎること、そして、父親の存在が希薄であるという特徴が顕著である。そして、これらは、現在若者におけるひきこもりの特徴にそのまま通じるものである。牛島（2000）によれば、ひきこもりをする現代の若者たちの個別の特徴としては、現実離れした理想をもっている、空想的である、自分のことを気にかけてくれる周囲の人たちに無関心である、仲間関係

がとても希薄である、対人関係で傷つきやすい、などの特徴が挙げられているが、これらの特徴は、完全に家にいて外出できない不登校の子たちの特徴とそのまま重なっているように思われる。

小中学校の不登校は、2002年度の統計ではじめて減少に転じたものの、20代以上のひきこもりの数は推定で100万人を超えていると報じられている。精神医学の分野では、統合失調症やうつ病などの精神疾患やアスペルガー症候群などの発達障害を主な背景に持たないという意味で「非分裂病性ひきこもり」という言い方をしているが、言い換えれば、人とのかかわりを取り結び維持していくことに困難を感じ、物理的にひきこもるという形で、その状況から身を守ろうとする子どもや若者たちの傾向とその増大を示しているのである。表1は、これまで述べてきた対人体験の質的変遷を簡略化してまとめたものである。

表1. 対人体験の時代的変遷

年代	症 状	体験の質
1960	赤面恐怖	恥ずかしい (他人からどう思われているか)
1970	視線恐怖 スチューデントアパシー (部分撤退)	怖い (他人は自分のことを醜い、臭いと思っているのではないか)
1980	醜形恐怖 自己臭恐怖	
1990	ひきこもり (全面撤退)	怯え (他人にとって自分はいてはならない存在、いるだけで迷惑な存在)

4. 不登校増加の社会的背景

では、このような傾向をもつ不登校が出現してきた理由として、どのような社会的背景が考えられるのだろうか。

滝川 (1999) は、現代社会のとりわけ義務教育の浸透に伴う高校進学率の高まりが、不登校の増大と関連が深いことをグラフから示し、現代型不登校の中核に「醒めた倦怠の気分」が巣くっていることを指摘する。確かに、1970年代半ばより中学生の9割以上が高校へと進学するようになるが、この時期と不登校が増え始める時期とが重なっている。これは、それまで学校が持っていた「聖性」が衰弱してきたことを意味し、その結果、子どもを学校に向かわせる力が、将来の目標を達成し幸せになるためというよりも、「みんなが行っているから行く」以上の積極的な理由を見出せなくなってきたことを意味する。すなわち、公教育の導入による社会の近代化という目的、さらには、学校が高度経済成長期まで担ってきた豊かになるという国民的目標がほぼ達成されたところから、現代型の不登校が増え始めたということである。

佐藤 (2000) は、日本の社会が、頑張れば幸せになれる社会から先の見えない社会へと変容するにしたいが、子どもたちが学校や授業に対する積極的な姿勢を失ってきたことを、子どもたちの「学びからの逃走」として捉えている。現在の教育問題のひとつである学習意欲の低下、

例えば子どもたちの自宅での学習時間の短縮をはじめとする現象は、まさに学習意欲がより高い学歴や物理的豊かさを目指すことではもはや支えきれなくなってきたことを示唆しており、より根源的な「学ぶ動機」を問われるようになってきているのではないか。そして、このことは、不登校の増加と水面下で連動しており、すべての子どもたちの意識下で同時に進行している可能性があると考えられる。このような観点からすれば、学校現場の教員が憂えているのは、研究者や臨床家による書籍や研究にしばしば登場してくる不登校、すなわち思春期を迎えて息切れする「よい子の息切れ型」だけではなく、耐性に乏しく無気力の色合いの濃い不登校の子どもたちの増大であろう。公立の小中学校の現場には、病院の小児科や精神科外来を訪れる不登校の子どもたち以外の様々なタイプの不登校が見られるのであり、その心理的中核にあるのは、将来的展望の見えにくい時代にあって、観念的に何が重要かよりも感覚的に自分らしい生き方を求めること、あるいは日々の生活を気ままに楽しく過ごすことへの志向、あるいは疲れやすさ、傷つきやすさ、その意味での耐性の乏しさという傾向ではないかと考えられる。

5. 神経症型不登校の変容

それでは、これまで述べてきた時代的変遷の中で、これまで不登校は概ねどのような現象ないしは症状として理解されてきたのであろうか。そのためにまず、従来の不登校理解の中心に位置していた神経症タイプの不登校の子どもたちについて考えてみなければならない。

小泉(1988)は、様々な背景を持つ不登校の中から、神経症的登校拒否を独立させて捉えている。すなわち、心理的理由による広義の登校拒否として、神経症的登校拒否、精神障害によるもの、怠学傾向、積極的・意図的拒否、一過性のもの、発達・学力遅滞の6つを取りあげ、その中の神経症的登校拒否を狭義の登校拒否として取り出し、それが不登校全体の約7割を占めるという統計結果を出している。文部科学省が採用している分類では、不安など情緒的混乱の型というのが、これに直接関連するタイプである。最新(2002年度)の統計では、その割合は、小中学校合計で26.1%を占めている。

従来の神経症タイプの中核には、学校に行きたいけど行けない、行かなければいけないと思っているも行けないという葛藤と不安がある。したがって、無理に行こうとしたら、身体に症状が出て、実際にお腹が痛くなったり、熱が出たりするタイプであるとも説明される。したがって、援助の基本は、本人に登校刺激を与えず、あたたかく時間をかけて見守るという方法がその中心であった。

しかし、現在増えてきている不登校は、上記の神経症からは少し質的に変わってきたことがこれまでの考察を通して明らかにされた。すなわち、学校に行きたいけど行けないという葛藤が意識の前面からは後退し、むしろ対人関係における「傷つきやすさ」「受身性」を特徴とした「何となく行きたくない」「なんとなく行かない」という曖昧な動機による不登校である。言い換えれば、はっきりした理由があるわけではなく、何となく行かないという印象から、一見怠け、怠学に近いものに見えたり、場合によっては、わがまま、甘えに思える不登校である。しかし、本人の内側の世界からすれば、やはり本当は行かなければならないという気持ちや行きたい気持ちが全くないわけではなく、周囲からのプレッシャーは感じつつも、それでも学校には行けない、あるいは教室には上がれないという状況に近い。このように葛藤が内面から一歩後退した形で心の奥にくすぶっているというのが、現代の神経症型不登校ではないかと考えられる。

再び文部科学省の分類で言えば、不安など情緒混乱の型と無気力型の両方の特徴を備えたタイプがこれにあたる。無気力型というのは、先生が迎えに行けば来るけれども、迎えに行くのをやめたらまた来なくなるという特徴があると言われているが、これら2タイプの区別が非常に難しくなってきたのが、不登校の今日的傾向である。一見無気力型に見えるけれども、無理矢理引っ張ろうとするといろいろな症状が出るし、かといって、どうして行けないのだろうといろいろ探ってみても、そこにはこれといった動機なるものが見あたらないという状態である。したがって、不安情緒混乱型と無気力型の区別を厳密に行うよりも、両者の特性を合わせもつ複合型として捉えられる不登校が増えてきたという言い方がより正確であるのかもしれない。実際、2002年度の統計では、この複合型が26.9%とトップにきている。

ここで、最近よく見られる神経症型不登校の典型的な事例を紹介してみよう。

事例：女子中学生不登校

中2のクラス替えによってそれまで親しくしていた友人がいなくなったこと、新しくできた友人に「八方美人」扱いされたこと、男子生徒が他の女子生徒に乱暴な言葉づかいをしていたこと…。これといったきっかけは見当たらず、強いて言えば、これらの出来事が重なる中で徐々に元気がなくなり、5月の連休明けからそのまま不登校となる。夏休みまでは家にいても何もせずぼんやり過ごすことが多かったが、2学期に入ってから担任の誘いかけもあって時折相談室に登校できるようになる。しかし、相談室への登校が精一杯であり、職場体験実習には参加したが、結局、教室での授業は一度も受けられないまま3学期を迎える。欠席が続くときは担任が家庭訪問をし、勉強を教えるということを繰り返していたが、宿題を多く出すと訪問を嫌がることもあった。彼女は、もともと勉強は嫌いではないが、今のクラスの生徒と一緒に授業を受けたり、活動することができずにいた。3年生になると、大人しい子たちに目の届く担任に変わり、再びもとの親しい友人とも同じクラスになり、時折体調不良で欠席する以外は、ほとんど毎日教室に登校ようになる。しかし、1学期終わりに友人関係のトラブルの後、欠席しがちとなり、夏休み明けの2学期からは再び相談室登校となる。

その後、この女子中学生は、スクールカウンセラーと継続的なカウンセリングを受けるようになる。ラポールがある程度できたときの面接で「学校の何が一番嫌なの？」とさりげなくその理由を尋ねられると、一瞬うつむきしばらく考え込んだが、ようやく「教室の雰囲気かな」という言葉が出てきた。そして、それ以上は何も答えなかった。これといった具体的なきっかけがあるわけではない。はっきりとした理由があって行けないのではなく、ただ何となく行きたくない、無理して行こうとすると身体が言うことをきかなくなる。しかし、単なる怠けとして見ると、それとも違う。

例えば、好きな授業や嫌いな授業について具体的に聞いていくと、数学の授業が好きだとか、体育は嫌だなどの好みはあるが、「じゃあ数学の授業だけは出てみようか」と誘うと、とても重そうな表情になるという具合である。問題はこれら一つ一つの好き嫌いの背後に、あるいは根っ子に何かあるのか、そこを問うていかなければならない。

そこに不安があるのか、親に何か訴えたいものがあるのか、無気力があるのか、それとも語るべき内面そのものが希薄なのか。そこが曖昧でぼんやりとしている。したがって、自分の内

面を自分の言葉で捉えられるようになるにはとても時間がかかる。それゆえに周囲の者からは理解されにくい。これが、現代不登校が抱える「新しい神経症」の特徴であると捉えることができる。

6. 不登校に見られる「新しい神経症」

筆者の臨床経験によれば、このような特徴を合わせ持ち、中学校における長期の不登校を経験していても高校からは普通に登校できるようになる子どもたちもいる。このタイプの不登校の子どもたちに共通する特徴のひとつに、自分の人生をよりよく生きたいと願う心が育つてくる時間を十分に保証されたという点が挙げられる。そこで保証されたものは、自分の人生を自分らしく生きたいという意志であり、今はどうしても学校には行きたくないという意志でもある。

このように考えると、豊かな時代になったことが不登校増加の背景にあるとしても、そのような捉え方だけで終わってしまうことには問題があるのであり、現代は人が一個の主体として自分の人生を生きていけるようになること、あるいはそのことをお互いが認め合えるようになるための過渡期、模索の時期とも言え、不登校はその先がけ的現象であると言えるのではないだろうか。先に引用した中2の不登校女子生徒は、その後、面接の中で次のようなことを語るようになる。

「教室にいるととにかく息苦しい。授業を受けているときはあまり気にならないけど、休み時間になると周りの人たちの声の中で私の中で異常に響き出す。…いつも誰かと楽しそうに群れないとやっていけないような感じで、ひとりでじっと机についていることに耐えられなくなる。でもそんなことを気にして、仲良さそうにしている自分のことが好きでない。こんなことして何になるのか、自分でも嫌になった。疲れた。そしてこんなことを先生に話している自分のことも好きではない…」

この生徒の発言には、教室の中で自分がありのままの自分でいても大丈夫という感覚を維持することがいかに難しいかがよく示されている。このタイプの不登校の子どもたちは、人といながら自分でいられるという居場所の感覚を失い、教室から物理的に離れることで自己感覚を取り戻そうとしている様子がうかがえる。そこには、無理をしなければ維持できない友人関係とは何なのかという本人の切なる問いかけが存在する。

これは言い換えれば、自分が自分でいることの見失わずに、人と共にいることを求める自分探しのテーマでもあり、自分自身でいても大丈夫な人間関係とその確かな手応えのあるかわり得んがためのその子なりの訴えである。実際に援助していく立場からすれば、無理をしない自分自身がほどよく受け入れられ認められることで、自立に向かえるような対人関係の体験が必要である。自分が自分でいられなくなったとき、人は重要な他者からほどよく支えられることで自己感覚を回復し、自立へのステップを歩んでいけるようになるのである。不登校の子どもたちは、そのような意味での人間的なかわりを必要としている。

しかし、このようなかわりは不登校の子どもたちだけが必要としているものではなく、不登校にすまねなくて、不登校の子以上に寂しい気持ちを持ちながらあるいはその気持ちを切り捨てて毎日学校にだけは通っている子どもたちもいるのではないだろうか。何かきっかけさえあれば、いつ不登校になってもおかしくない寂しさを抱えた子どもたちがたくさんいるかもしれないと想像することはさほど非現実的なことではないと思われる。さらに言うならば、このような寂しさを抱えた子どもたちが学校に行き、その満たされない感情をいじめや無視やか

らかいによって解消しようとしている可能性も考えられる。そのような子どもたちが不登校の子どもたちを教室から作り出している可能性について考えてみることも必要ではないだろうか。

このような次元で捉え直してみることによって、はじめて、文部科学省が唱えた「不登校は誰にでも起こりうる」という言葉が重みをもってくる。増井(2002)は不登校をはっきりしたきっかけによって学校に行けない「学校嫌い」とはっきりした理由もなく学校に行けなくなり長期化していく「不登校」とを区別し、後者の子どもたちの在り様に関する逆説的な見方を提示している。それをまとめたものが表2である。

表2. 増井による不登校児の理解 (増井, 2002)

不登校児とは逃避している子ではなく、逃避できない子である→心のどこにも逃げ場がない 苦しみと完全逃避の必要性
不登校児が閉じこもるのは閉じこもれないからである→心の中に自分が落ち着ける部屋がない 苦しみ
不登校児は頑固ではなく、頑固になれない子である→影響されすぎる故の頑固さ
不登校児とは我がままではなく、我がままになれない子である→我慢と我がままの本当の意味を正確に理解すること
不登校児とは無気力でなく意欲的でありすぎる子である→意欲がないという意欲
不登校児はウソツキではなくすべてが本当である
不登校児とは言うことを聞かない子でなく、聞きすぎている子である

また、芹沢(2002)は、ひきこもりは「自己領域」を守り回復するためのその人なりの手立てであり、まずは十分にその試みが保証されなければならないとし、そのような環境側のサポートがあれば、ひきこもりは時間的な個人差はあっても一過性のもので終わることを指摘している。すなわち、ひきこもりには正しいものとそうでないものがあり、正しいひきこもりは必ず、「往路」「滞在期」「復路」の3つの地点を通過するというのである。

7. 現代社会における不登校の存在意義

高度経済成長の結果、物質的な豊かさに比例して生活スタイルは個室化し、それぞれの家庭が担う文化も多様化してきた。その多様化した家庭文化の中で育てられた子どもたちが一斉に集う場が学校である。これまで「世間の常識」として通用していた「当たり前」の感覚が共有しにくくなってきたその分だけ、人間関係における誤解や衝突は増えていく。「お互いさま」「お陰さま」という意識が弱まり、子どもたちの仲間関係だけでなく、親同士の間人間関係も難しくなっている。人間関係のストレスに耐えられない親や子たちが、勢い対人関係そのものから退避する傾向が出てきたことも確かである。子どもの発達課題の観点からすれば、幼児期から学童期にかけて、遊びの中で友達に揉まれる体験の不足が、前思春期から思春期にかけて、友達の目が気になる、ひとりになりたいときにひとりになれない、自分のありのままが出せないなどの形で問題化する。そのひとつの形が不登校である。

しかし、この現象は、これまで村落共同体を人間関係の基盤に据えていた日本社会が、その時代的な近代化に伴い生活スタイルを個室化させてきたこと、その過渡期における揺らぎの現

象として捉えることができる。過渡期における対人関係の様相は「世間」的な意識は色濃く残りながらも、他人とは違う個人として在ろうとする意志が立ち上がってきており、それが故に人と共にいるという体験が、自己の中で葛藤状況を生み出しやすい。この過渡期の揺れを最も強く意識化するのが、自己意識の急激な発達をみる思春期・青年期であることは間違いないことである。その意味で、不登校は、個人病理の観点だけではなく、生活スタイルの個室化に伴って派生してくる必然的な社会問題として理解されなければならないのではあるまいか。

大石(2002)は、不登校やひきこもりの現象及び問題は、いずれも現代社会の豊かさが生み出した問題領域であり、その背後には人間にとって「本当の豊かさとは何か」ということに対する本質的な問いが存在している。そしてその問いかけは、豊かであるにもかかわらず生活の時間は加速度的にゆとりを失っているという「時間に関する逆説」と人間関係が加速度的にお互い様意識や寛大さを失っているという「対人関係に関する逆説」の2つに集約されることを指摘した。したがって、現れる発達時期は異なっても、不登校とひきこもり問題の根底には共通するこのような時代・社会的背景が存在していると考えられるのである。

そこでは、時間的、空間的ゆとりをいかに回復するかという課題と同時に、援助者を含めた他者が、彼らの「個」としての領域を、他者からの援助を一時的に拒むことのできる自由と主体性まで含めてどこまで尊重できるか。そして、その領域を侵さないこととその人の人生がよりよいものであることを願って接近する援助者の行為とをどのように重ね合わせることができるのかという問いかけが重要になってくる。この問いかけを抜きにして、このような子どもたちへの援助や接近を考えるわけにはいかない。なぜなら、不登校やひきこもりとは、その端緒において人との関係に躓き、いったんは人とのかかわりを遠ざけることを動機として含んでいるからである。遠ざけた人の中にこれからかかわろうとする援助者も含まれているのである。したがって、この援助者自らの問いを抜きにした援助と接近は、援助側の一方的な自己満足か逆の徒労に終わる可能性が高いと考えなければならない。

例えば、わが子が不登校になったとき、その親が学校に行くように子どもを説得しようとする場面を想定してみよう。親の側の学校に行って欲しいという気持ちの背後には、このまま行かなければ将来この子はどうなるのだろう、この社会の中で一人前にやっていける人間になっていけるのだろうかという不安がある。そして、その不安は子ども本人がたとえ明瞭に意識していないように見えるときでも、子どもの中に深く沈み込み、ある種の後ろめたさを感じさせることになる。この「世間」という見えないプレッシャーが親と本人を常に精神的に追い込み、今という時間を生きにくくさせてしまう。親であるがゆえの不安と子どもが自ら被るであろう後ろめたさは、不登校という自己決定を本人自身に行いにくくさせ、かえって親と子の双方に本来の課題への取り組みを遅らせてしまう。それは、親と子の不安やある種のうしろめたさにもかかわらず、本人が不登校を選ばないしは選ばざるを得ない事情とは何なのかということが、周囲の者たちに了解されないままであることを意味する。この事情の中に子どもの「個」としてのどのような思いや生きにくさがあるのかを見ていこうとする姿勢が必要である。そして実際には、不登校の背後にある事情がわかることそれ自体よりも、その事情を理解しようとする姿勢が本人に伝わり、そこからお互いの歩み寄りと前進への模索が始まることが重要なのである。つまり、不登校というのはあくまで現象や状態を指し示す言葉にすぎないのであり、その背景には学校に向けてその子の心を重くする一人一人の異なる事情がある。これらを丁寧に了解していく作業を行いつつ、今のその子を現実的にどう支えていくかを、当面は見守るといふかかわりをも含めて考えていく。そのような対人援助ないしは対人関係そのもののあり方

に対する問題提起として、不登校を捉えることができるのではないだろうか。

8. 現代型不登校への援助 —親の支援を中心に—

最後に、このような問題提起として理解される不登校に対して、周囲の者や援助者は何をなすのか、その基本的方向性について確認しておきたい。小林(2003)は、不登校の増加は、学校が現代の子どもに合わなくなってきた様相を象徴的に表しており、それはわが国の社会生活全体の激変と関連していることを指摘する。さらに、不登校問題を減らすためには個々の不登校問題の解決だけでは不十分であり、問題の解決よりも新たな不登校の子どもを生み出さないこと、つまり、問題の予防を目指す方が効果的であるとしている。そして、この予防的観点の中には、これからの学校教育が今の子どもたちひとりひとりにとって充実した場、楽しい魅力的な場になるような配慮と工夫が必要である。それにもかかわらず、不登校が出た場合には、まず親と教師が信頼関係を作り上げ、子どもの成長を支えていかなければならない。しかし、実際には親と教師とがうまくつながらずに、結果的に子どもが放置されてしまうケースは少なくない。さらに、教師はクラス作りを通して他の子どもたちにも不登校の子の存在を伝え、他の子どもたちが何らかの動きが起こしやすいようにしていく働きかけも重要である。小林(2003)が、不登校の子どもを援助するのなら、不登校の発生要因ではなく、問題の維持・悪化要因に着眼する必要があると指摘する根拠はここにある。親と担任の関係にしても、クラスの他の子どもたちとの関係にしても、これらの関係におけるコミュニケーション不全が問題の維持と悪化に影響を与えていることは多い。したがって、不登校本人に対する直接の働きかけは、これら周囲の者たちの関係の回復の中で行われるときにはじめて大きな力を発揮する。

もちろん、これまで述べてきたような特徴を持つ現代型不登校の子どもを実際に援助していく際には、本人の中で葛藤が十分に形成されていないことが多く、不登校を自分の問題として引き受けるための心の準備が整うまでには時間がかかるのは確かである。特に、肥大化した自己愛の問題を抱えた子どもに対しては、ある程度メリハリのある対応によって子どもの生活の空気そのものを変えてやる必要があるとされるが、それには親による協力が不可欠である。

しかし、実際には親がそれを行おうとしても子どもが言うことを聞かないということがあがる。あるいは親はそれをすでにやっているというかもしれないが、そのやり方がいつもの生活の空気の中で行われているということが多々ある。言い方を換えれば、それまでの親子の中で育まれた関係の土壌がそれをさせないのである。例えば、援助者からの助言によって山登りに行ったとしても、そこで出会う風景に親が感動し、その感動を子どもにからだごと伝えることができないのならば、義務的に山に登ることはマンネリ感を伴う疲労しかもたらさないのと同じことである。そこには、子どもの方が親のその安っぽい手段を見抜いたり、親の方もそのことに薄々気がついていたりするものである。言うなれば、山登りの素晴らしさをからだごと伝えることができるような親だったならば、そもそも子どもは不登校になりはしなかったというほどの事情がそこには見え隠れしているのである。

そこでまず援助者は、親が自分たちの力だけではどうしても子どもを学校に行かせることができないという感覚を援助者に対して表明できるようにサポートすることである。親がこの感覚を表明できないままに援助が行われることは、親の親としての潜在的な無力感や現実的な不安をさらに増幅することになるからである。専門家を自称する援助者たちが、親に対して「こうした方がいいですよ」「こうしてあげてください」といった助言を行うことは、援助行為の中ではあまりに当たり前の光景となっているが、そのような助言が先行する面接は、結果的に親の

主体意識をさらに麻痺させ、専門家への依存を強めることになる。

親自身がまず自己の無力を表明できるようになることで、親は自分が変わっていく勇気を得るのである。それによって親の方が子どもを学校に行かせるか行かせないかという迷いの次元からもうひとつ上の対応次元に身を置くことができるようになる。もうひとつ上の次元とは、学校に行くか行かないかよりも大事なこと、すなわち、親自身が学校に行かない子どもを前にして自分の人生をいかに生きるか、限られた人生の時間をどのように過ごすことがよりよいのかについての考えを深めていくことである。例えば、その子が仮にある程度の葛藤と後ろめたさを感じつつも、結果的に楽な方に流されているとき、親はその方向を正しい方向に修正したいという気持ちに駆られる。その気持ちを親があくまでも自分の気持ちとして子どもに伝えることができるようになることが最も重要なことである。その「自己一致」した言葉は子どもに伝わる。そのかわりは単に学校に行かせるための説諭ではなく、「自分としてはなぜ行くことが大事だと考えるのか」や「本当はどうすることがいいことなのか親としてもわからないがそれでも何とかしたいこと」などを伝え、それによって本人に現状への認識と揺さぶりをかけることができるのである。それでもなお本人が今は明らかにできない何らかの理由によってどうしても学校に行けないのだとすれば、その理由探しを一時保留し、一日一日をとりあえず充実して過ごせるための方法を互いに検討し合える関係を作り出すことである。具体的には、今の自分が少しでも気持ちよく過ごせるための多少の工夫や、場合によっては生活を充実させるための協力を学校側をお願いするということもあるだろう。そのとき親ははじめて子どもにとっての援助者としてそこにいることができている。大事なことは、問題の解決は問題解決への負担を軽くしていくことから始まるのであり、その方法は、問題を抱える本人にまずその家族が援助者として立ち現れることができるような専門家による援助なのである。現状の中で可能な適応上の工夫を創造し実行していく力はそこから生み出されてくる。このように、本人を受け入れる側の人的・物的環境の整備や配慮を工夫し実行していく作業は、援助者によって一方的に行われてはならず、あくまでも本人とその家族の事情を理解し支えていこうとする話し合いの中から生み出されてくるということである。

このように考えると、現代型不登校の援助は、不登校という行為によっていったん断ち切られたその子を取り巻く人間同士の関わりを再び回復し、日常的に生きられる関係にしていく作業に他ならない。不登校という現象はその回復作業に関わりのある周囲の人間すべてに問いかけ、また要請しているのである。したがって、まずはこのような方向での援助が可能な限り行われること、あるいは行われているかどうかを問い直してみることを出発の基本としなければならないだろう。それは現代社会が抱える人間関係の問題をひとつひとつ地道に解きほぐしていく作業とそのまま重なっているのではないだろうか。

<文献>

- 門伸一郎・高岡健・滝川一廣 (1998) 不登校を解く. ミネルヴァ書房.
- 笠原嘉 (1978) 退却神経症という新しいカテゴリーの提唱. (中井久夫・山中康裕編) 思春期の病理と治療. 岩崎学術出版社.
- 小林正幸 (2003) 不登校児の理解と援助. 金剛出版.
- 小泉英二 (1988) 教育相談の立場からみた不登校の問題. 児童青年精神医学とその近接領域 Vol.29, No.6.

- 増井武士 (2002) 不登校児からみた世界. 有斐閣選書.
- 文部科学省 (2003) 学校基本調査速報.
- 森田正馬著・水谷啓二編 (1959) 自覚と悟りへの道. 白揚社.
- 森田洋司編 (2003) 不登校—その後. 教育開発研究所.
- 大石英史 (2002) 援助関係においてクライアントの存在を無条件に受け入れるということ—若者のひきこもり問題を踏まえて. 山口大学教育学部研究論叢第52巻第3部.
- 坂本昇一 (1993) 登校拒否のサインと心の居場所. 小学館.
- 斎藤環 (2003) 若者の心のSOS. NHK人間講座.
- 佐藤学 (2000) 「学び」から逃走する子どもたち. 岩波ブックレット NO.524.
- 芹沢俊介 (2002) ひきこもりという情熱. 雲母書房.
- 高垣忠一郎 (1991) 揺れつ戻りつ思春期の峠. 新日本新書.
- 高塚雄介 (2002) ひきこる心理 とじこもる理由. 学陽書房.
- 滝川一廣 (1999) 悩める中高生. 教育と医学第47巻第5号.
- 牛島定信 (2000) 最近のひきこもりをどう考えるか. 精神療法 Vol.26 No.6. 金剛出版.